

「復興ワードマップ研究会」(第12回)速記録

日 時: 2019年11月11日(月) 14:00~16:00

場 所: 龍谷大学梅田キャンパス セミナールーム

参加者: 近藤、宮本、石原、大門、宮前、立部(記)(敬称略)

1. 学会大会・分科会のふりかえり

▶ 全大会の様子について

- ・一つひとつのテーマの委細を報告することは割愛し、どういう研究会をしてきたか、どういうことばについて議論したか、どういうコンセプトで議論したかを報告。**Build Back Better**について投げかけた。復興学会として見過ごしていいのか、学会の議論は何だったのかと。最後に どうやって手段の目的化を避けるかについて会場と議論した。
- ・会場より「**Build Back Better**は別にいいのではないかと思う。他国に目を向けてもいいのではないか。途上国では **Build Back Better** が通じるところもある」という意見があった。返答としては、そういう地域もあるかもしれないが、ここで言いたいのは、**Build Back Better** ということばを振り返りながら、復興学会が本当に問おうとしていたのは何だったのかを確認した方がいいということ。**Better**が期待できない未来にどのような復興ができるのかと。別の分科会(災害復興における暮らしの再生—生活再建と安全確保の両立を目指して—)では、生活再建と安全概念が対立する、そこでどうバランスをとるかという議論をしていた。ただ、世代が連続していた時代の安全と生活再建のバランスの話と、そうではなく先細っていく時代のバランスの話は違うのではないか。であれば、ベターが期待できない未来に合わせた新しいアイデアも出せるのではないかと話を振った。**Better**とは誰にとっての **Better**なのか。実際に起きていることは、国連にとっての **Better**ではないか。ショックドクトリンのようなことが山ほど起きている。

→ 全大会で出てきたような「反対意見」があるほうが健全だし、対立軸が見えてよい。

自分がメインストリームだと思っている人たちの胸を借りて、議論を深めていこう。

- ・また他には、会場から「支援、まちづくりということばについても考えた方がいいのではないか」という意見も出た。参考にしていこう。
- ・懇親会では、分科会に対して「よかったと思う」との意見もいただいた。個別の話題提供も面白く、若い世代が発表するのがよいという意見もいただいた。

▶ 学会大会全体を通して

- ・参加者が学者だけでなく、避難者やファイナンシャルプランナーなど多様で、現場の人が研究者と一緒に発表するというのがよかった。現場の方から「本当に手段が目的化す

るんです」との実感を込めたコメントもあった。

- ・分科会で「コミュニティ・ビジネスということばは、やっている当事者は使わない」という意見があったが、それに対して、だから何かしらの配慮をした方がいいということではないと思う。逆に当事者に「コミュニティ・ビジネスってどういうことだと思いますか」と聞いたら、絶対面白いことばが出てくると思う。中越でも「復興ってどういうことだと思いますか」と聞いたら、「政治だ」、「孤独じゃないことだ」などの回答。理論的に精緻化していくという意味での貢献ではなく、手段が目的化することを避けるための根っこのところを確認できる。

→ 誰にとっての「面白い」ことばか。こちらが「面白い」と思うようなことを当事者と一緒に話すことで、お互いが元気になれるようなかたちであればいい。

- ・研究会に対して「ことば」ということばをもっと明確化した方がいいのではないか。wordなのか、languageなのか、contextなのか、communicationなのか」という意見をもらった。

→ 研究会として、そのあたりは整理してもいいかもしれない。そのうえでこの研究会の問題意識がどこなのかは押さえておいた方がいい。研究会でやろうとしているのはことばをめぐる一つの運動。復興という運動、営みを見ていこう、というのがこの研究会の一つのめざすところ。

2. 研究会の論文執筆について

- ・もう一度分担執筆して、積み上げるやり方もあるが、羅列だけで終わる可能性もある。深い部分の論考としてまとめるという手もある。
- ・小さいボールを投げてもいい。エビデンスを調査したようなデータ、災害弱者アンケートとか。そういうものもどんどん公開していった方がいい。
- ・手段／目的化の部分は、どんな場面でも当てはまる。その悪いループをどう断ち切るかが実践的にも要請されている。パターンリズムを悪者扱いする論考が多い中で、必然的にパターンリズムが起きるのを受け止めたうえでの論考。パターンリズムは関係性の中で良くも悪くもなる。
- ・ハイデガーのテーゼの中に「科学は考えない」というテーゼがある。科学は、科学的なことばを当てはめると、分かったつもりになって先細っていくということがある。細分化ゲームをしていく。パラダイムをつくってしまうのでその中でみんながやりとりに安住してしまう。働きかけに限界もある。そのようなことを指し示していると思われる。
- ・私たちもことばの内在的な限界を見据えながらも、そこで立ち止まらずに、ことばでどうつながっていくか、手段を目的にせずどうつながっていくかを考えている、ということ私たちが材料とコンセプトで書いていきたい。年度末までそうやって走っていけるか。ステージをぐんと引き上げるか、もう少し熟させるか。

3. 来年度以降の研究会を見据えたフリーディスカッション

- ・3つのフラグに通底しているコンセプトである「科学主義」、「数値化」、「客観主義」など、それらを深掘りする読書や探索をしたい。例えば「普遍化」の問題に言及しているものはあちこちにあると思うが。切り口を磨くにはどうすればいいか。例えば『プラスチックワード』という本も参考になるかもしれない。
- ・成長主義に対する批判もたくさんある。ローマクラブから始まって、みんなが定型的に引用する議論。その辺も、ずっと言われ続けてきたけどずっとかわされてきたもの。科学というものに成長主義はセットされていて、科学はステップアップできることを前提に回っている。シュリンクするということも科学的に言えると思うが、大きなドライブとして科学は発展を前提としている。熟成というときもあるが。行政やメディアなど世の中を動かしている側は、ある意味、楽観主義に立って、「どうにかなるよね」と言って走り出している。走らされている。生活空間と乖離している部分も多い。
- ・科学が発展する歴史と、資本主義が拡大していく歴史が重なっている、というのが社会学の常套句。なぜなら、自分たちが経験していない未来を知っているような存在を想定しないと、科学も進歩しないし、お金も回っていかない。今もそのドライブのさなかにいる。科学の進歩主義を乗り越えようと思ったら、資本主義の運動自体も乗り越えないといけない。
- ・力を持ったカウンターなのかもよくわからない。かつてフューチャー・デザインということばも流行るかと思ったが。イロコイ・インディアンは7世代先のことも考えて今を生きているという話。けど、そういうものが自分たちに力を与えてくれない。「ほお」と思ってそれだけで終わっている。

→ その議論も、7世代前から強固につながっていると感じられる社会での話。

- ・資本主義全体をどう乗り越えるかという議論については、いくつか対抗軸が出せる気がする。理論的には柄谷行人。実践的にはシェアエコノミーも面白そうだし、小川さやかの『「その日暮らし」の人類学』もよい。今までの経済学者が計算しなかったような非常に零細な経済活動が実は馬鹿にできないサイズになっているという話。資本主義に組み込まれているようで、資本主義のルール通りに行動していない。それで生き延びている。自分自身のもうけを最大化しようと思うならやめた方がいい、ということをやっている。ものすごく助け合ったり。すぐにそのマーケットは飽和するけど、助け合い行動を続けているから、次の新しい商品にすれば生き延びられる。
- ・復興の営みを考えていく先に価値の創造が待っているからやっているわけで。待っていないなら復興なんてノウハウは抜いて勝手にやってくればよい。学会にする必要もなくなる。
- ・これまでの科学や資本主義に何となく問題があるということは自明なのに、オルタナティブなものもなかなか見いだせない世の中で、どのようにオルタナティブに社会を見

るか。「もう一つの社会」。

- ・柄谷行人の国家・市場の議論を持ち出すと、「国家にもいいところがあるんじゃないですか」と言われる。ある世代の人にとって、国家を批判することは左翼的な思想だととられる。でも、今起きている問題を考えようとしたら、国という問題をどう考えるかを考えずにはいられないはず。難民の問題、イスラーム世界の問題。国家という枠組みを強引に持ち込まれることでもめている。
- 「乗り越える」と言うと、既存の枠組みを否定されているように聞こえる。弁証法的にとらえることがナイーブに取られる。ご破算にするように聞こえる。
- ・国家というものが唯一当たり前のあり方ではないということ。国家と市場が結託している。それによってうまく回っているということも事実。けど、それだけではないということ。
 - ・Eテレの「バリバラ」で神戸市長田区にある「ハッピーの家」が特集されていた。リースペースになっていて、高齢者、認知症、家に居場所がない子供やシングルマザーなどが集まっている。無法地帯に近い。恐ろしくうるさい。ぐちゃぐちゃになっている中に、よくよく聞くと「震災で家を焼け出されてね」という遺族の方もいる。でも、みんないろんなことを抱えて「止まり木」みたいになっている。ディレクターがカメラマンと一緒にインタビューしようとするが、だいたい「言うことなんかないわ」と断られている。でも、それがそのまま放送できてしまっているのが面白い。見ながら「運営のお金がどうなってるのか教えてくれ」と思うけど、まったく教えてくれない。「障害者ってこういう部分で頑張っているよね」という枠内で収まっている番組だと、安心して見てしまうが、ステレオタイプの部分も多い。
 - ・もう一つの価値を言語化しないといけない。今、急激にボランティアが公助に飲み込まれようとしている。ボランティアありきの災害対応。ただ、2つの意味でチャンスだと思う。一つは、ボランティアの問題じゃない、ボランティアの仕事じゃないということ。ブルーシートを替えるボランティアが足りないなんて、本当はちゃんと公助でやらないといけない。もう一つは、これまで全社協がボランティアの足りない地域を出すなんてことはなかった。もはやボラセンがどうか言っている場合じゃない。もっと神戸の時みたい直接的なボランティアのかかわりが増えるような気がする。でも気をつけないと、本当に公助の一部みたいに扱われてしまう。
 - ・Webの政府広報に「被災地を応援したい方へ、災害ボランティア活動の始め方」というページがある。推奨する活動まで載っている。政府がボランティアを推進し始めた。災害直後にこんな広報を出している場合だろうか。子ども食堂の支援を政府がするのも同じ問題。政府がやれてないから子ども食堂が始まったのに…。子ども食堂は大事だけど、子ども食堂でいいのかと。タガが外れ始めている。けど、「外れているよ」と

批判するのではなく、であればどういう社会があり得るのか。

- ・最近『ボランティアとファシズム』という本が出た。関東大震災の後のボランティアが
いかに戦時体制に取り込んでいくための動員ということばに結び付けられているか。
東京オリンピックをにらんで出した本だと思う。政府広報も、この本で書かれているこ
とと似たようなにおいがする。
- そういう没年ストーリーでも書けるが、元年ストーリーでも書けるはず。賀川豊彦が
神戸の時のボランティアと同じようなことをしている。没年ストーリーと元年ストー
リーの両方を見ることが大事。
- ・ミトコンドリア筋症の H さん。一人暮らし。停電すると人工呼吸器が止まってしまう
ので、予備バッテリーを7台くらい持っていて、それで何日か過ごせる。ヘルパーさん
30 人くらいのチームで、24 時間体制で見守っている。人工呼吸器をつけている方の
家族会があって、そこの方々のための防災ハンドブックをつくっていらっしゃる。自宅
のスーツケースには、水や栄養分、ヘルパーさん2人分のグッズも入っている。備えが
できている。ただ、それを名指す言葉がない。「いい話だなあ」ということで終わって
しまう。こういう「もっと引き伸ばせたらいいな」と思うことを、言葉でもプロモート
できればと思うが。ベッドごとどうやって避難するんですかと聞いたら、ベランダの柵
を外して逃げるんですと。訓練もしている。要配慮者、災害弱者とパターンリズムの
カウンターになるような事例を探しながら、もう少しいい言葉も持てないかなと。
阪神・淡路大震災の時は人工呼吸器が止まって、ご両親が手動でアンビューバックを
動かして生きながらえた。学生がインタビューして、シンポジウムで発表すると言っ
たら、登壇したいと言ってくだった。
- ・こう取り組みから力をもらうことばがない。個別のエピソードを語るだけで終わって
しまう。「ああ、いいね」っていうような。ただ、ことばの弱さによってうまく伝わら
なかったり、誤解されたり、余計混乱を招きそうな気もする。エピソードだけをクリッ
プするしかないのか。でもこれを事例集に載せるのかというと、それもどうなんだろう。
- ・「依存」ということばをポジティブにとらえようとする。その言葉に寄せて語るの
が一番ぴったりくるのか。
- ・被災写真は、前例がなくて、試行錯誤、手探りの段階。被災写真ということばも生まれ
たて。マニュアルがまだできていない中で、ただ現実だけがそこにある。まだパターナ
リズム、マネジメントする主体が現れていない。
- ということは、時間がたてば3つの視点に飲み込まれてしまうということなのか。 、
金になれば企業も入って来てしまう、という考えも確かにある。
- 確かに、東北では富士フィルムがボランティアに入って来ていた。その後あまり写真
洗浄のブームが続かず終わってしまった。

- ・手段が目的化していくとき、管理に巻き込まれるときというのは、運動や仕組み・概念が、よく知っている人にしかできないという方向になっていくからなのかなと思う。
- ・写真は、スキャンするということになると、専門家の手が必要になるので、パターンリズムが起こりえるかもしれない。津波の場合は持ち主が分からなくて、いつ返せるかわからないので、とりあえず保存しておく。でも洪水の場合は持ち主が持ち込んでくるので、すぐに洗って返せばいい。専門家の知恵もいらない。

→ 誰かわからないということが一つのコミュニティをつくる。では、洪水の時はコミュニティを作りにくい？

→ コミュニティの作り方が違うのかもしれない。洪水の時は洗浄する人のコミュニティは作りやすいのかもしれない。「この人にお返しできる」という分かりやすさがある。実際にお返しする現場にも立ち会えて、つながりを感じられる。

- ・誰にでもできるようにしておくというのは、3つのロジックを避けるのに大事かもしれない。本当は誰にでもできるのに、誰にでもできないように見せている力学が働いている（これって、「防災」の分野のドライブそのもの！）。

- ・工学は、職能をつくるものだと言う先生もいる。科学の発展がいかに産業とつながって、その分野で仕事を持って来るか。産学連携が工学の至上命題。

→ 小田実の本で言われているかつての「産官学」は全部悪い意味、つまり癒着。

- ・日常の中で外化していることを取り戻していく作業。誰でもできますよ。主体性の回復の運動。復興の中では極大化して出てくる。

- ・被災した屋根に対して、「アシスト瓦」という取り組みがある。1~2年もつ。作り方を解説してくれていて、誰でも作れる。ただ、作るところまではいいが、屋根に上って瓦を差し込む作業だけはプロにやってもらった方がいい。

→ ブルーシートは足りないし、風でバタつくことでリスクもある。屋根が全部やられているということはあまりなくて、雨漏りするの局所的。だからアシスト瓦くらいがいい。ただ、屋根の上の作業なので誰でもできますと言いきにくい。実際危険性もあるし。

- ・栃木の人で、屋根のボランティアも少ないから、日頃から屋根に登れる人を養成する講習をやろうと思っているという。屋根のことをボランティアでっていうのもおかしいけど、とはいえ、また被災するかもしれないので、やっている。

- ・オルタナティブとは（個人的には）言いたくない。カウンターと言うと、メインストリームが軸にあることになる。もっとマイペースでいいと思う。

- ・「もう一つ」と言うのと闘っているようにとられがち。Mさんが言っていたニュアンスは、既存のものを否定するわけではなく、「こんなんでもいいよね」というものを提示しようという考え方。そういうものを提示しないと、「最後の一人」は救えない。そして減

災サイクルのあらゆるところに「もう一つ」があって、それを合わせることで「もう一つの社会」になる。

- ・災害を契機として自分の生き方を見つめ直して生き生きと暮らしている人をクリップすることも大事か。実際、しているのかもしれないが。もう少し強いカウンターを提示しなければ強烈な資本主義のドライブを超克できないのか。

→ 好景気を経験しなかった自分たちの世代では、そんなことは当たり前。どこかの会社にずっと勤めるなんて思っていないし、自分の感性に響くものに出会いたいと思っている。

- ・新しいムーブメントをつくろうとして、それを「学会」なんて体裁に入れ込もうとすると、それが本来批判しようとしていた対象に似通ってくる。権威主義的になってくる。急激に劣化が始まる。

(了)